

怒る女

今日 あした

「あの子を描いてみたい」久しぶりに心が騒いだ。彼女は妻が経営するレストランのアルバイト店員で、夏の間だけ軽井沢の店（「プカソ」）に来るそうだ。

昼飯を食べに敷地内にある「プカソ」に行くと、時々見かける年配の夫人がアルバイト店員をしげしげと見ている。店員は私から見ると後ろ向きに立っているのだが、新人だそう。夫人とは顔見知りなのだろう。

「私の顔、腫れていますか、朝、生垣を刈っていて……」
彼女はその夫人に言い訳でもするように、大きな図体をすぼめながらそう言った。

すると、客は一瞬皮肉な笑いを浮かべ、まるでその言葉が聞こえなかったかのように、ふんつと目をそらし、そのままメニューに目を移し、
「フルーツサンドウィッチとお紅茶を」と言い、メニューを伏せた。

「はい……」。
店員は頭を下げながら、傍で見てもわかるほど全身をこわばらせて返事をする、顔を上げ客に視線をもどした。夫人はあきらかにその店員を無視している。

回れ右をして厨房に向かう店員が、窓辺に陣取った私からはよく見えた。その顔は、まぶたが腫れあがり左の眼は半分しか開いていない。

それこそ、顔も首も手も腫れ、不快そうに怒りを漲らせている。まるで若いエネルギーの塊のように。

客と店員の間に何があったか知らないが「あの子を描いてみたい！」と思った。六十をとうに過ぎ、描こうという気持ちがすっかり枯渇したと諦めていたのに……。

私の名は、プカソ・佐藤。画家である。父親も画家で、幼い頃から息子の才能を評価していたので、周りから面白半分、『天才！ 東洋のピカソ！』とからかわれたことから、自ら付けたペンネームだ。

そのふざけたペンネームのせいか、斬新な発想をいまだに追い求めている自分にも辟易していた矢先だった。

彼女が私の所に注文を聞きに来た。

「小原浪子さんっていうの？ はじめてだね、いつから来ているの？」

私は彼女の胸についているネームプレートを見ながら聞いた。

「今週の初めからアルバイトで来ています。今日で五日目です。あつ、プカソ・佐藤！」

「そうだけど……その顔、どうしたの？ 毛虫？」

「はい、あつ、先生」と言い、チラッと自分を無視した年配の夫人の方に強い目を向けてから、開き直ったように、

「私、先生の大ファンです」と元気な声で言ってメニューを差し出した。その手が赤く腫上っている。

「ひどいね、痛くないのかい、痒いだろう」

「大丈夫です」

そう言うと、それ以上聞かれたくないとでもいうように手を後ろに隠した。相当の勝気だな、と厨房に去って行く彼女を目で追った。

注文したビールとカレーを食べ終わり、彼女が片付けに来た時には、時間をずらしたせいか、大方の客はいなかった。

「浪子さん、しばらくはここでアルバイトをしているのだろう、休みの時にも絵のモデルになってくれないかなー」

「えっ、先生のですか？……嬉しい！でも、この顔じゃあ……」

「顔を精密に描くわけじゃないから、腫れていたってかまわないよ。それにいずれ腫れはひくだろう」

「場所は先生のアトリエですよね、わー、見て見たい」

そう言いながら両手で口元を覆った。
表情が豊かだ。

「大学生？」

「いえ、専門学校に行っています」

「十代？」

「いいえ、もっと上です」

もっと上か……、でも若くてはち切れそうだ。

水曜日が良いと言うので、午後一時に約束したら時間通りにやって来た。

「いらっしやい。ああ、プカソは水曜日が定休日だったね」

「はい。広いですね。アトリエ入り口って書いてあったけど、植え込みのむこうに先生のご自宅があるんですか」

「そうだよ、中でつながっているんだけど、まあ、入りなさい」

「はい。早めに着いちやつて……、レストランとは随分離れているのですね。今日はプカソはお休みだけど、奥さまはご自宅にいらつしやるのですか」

「さあ、どうだろう。何でも気になるのだね。さあ入つて、アトリエの中も見つて回つていいよ。僕はクロッキーで君を描いているから」

「そうですか」

浪子はそう言うと、アトリエ中をうろろし始めた。小さな置物や絵の具など、持ち上げたり触ったり匂いを嗅いでみたり……、床に置かれているキャンバスなど、座り込んで顔を床につけんばかりに熱心に見ている。

私はクロッキー帳を広げ、彼女の動きを描いてゆく。あの凄まじい顔の腫れは、引くどころか、パンパンに赤く腫上つてつやつやしている。若いなあ、と思いつながら描いていく。目も鼻も口も、その上図体も大きい彼女は迫力があつて彼女の周りに光の線を描きたいほどのオーラを出している。

「専門学校つて言っていたけど、何のだい」

「服飾デザインです」

「ふーん、デザイナーを目指しているんだ。」

そう言えば、この前プカソで話していたご夫人とは知り合いなの？
途端に、彼女の顔から表情が消えた。

「あの人は、母の旦那の娘さんで……一緒に住んでいます」

「ずいぶん難しい関係だね。旦那さんつていう事は君のお父さんかな」

「はい。でも母も私もお手伝いさんみたいなものです。」

「ふーん、じゃあ、その虫に刺されたのは庭掃除でもしていたのかい」

「ええ、人使いが荒いんです、あいつ。朝ごはんの時、浪子さん、生垣に毛虫が付いているから片付けてねつて言われて……。そんなの自分でやればいいじゃん」

話が込み入つていそうだ。

「アトリエの中はもう見ただろう、その椅子に座つて楽にしなさい」

そう言うと、浪子は大きな図体を、どかつと投げ出すように長椅子に腰を落とすとした。

「それじゃあ、旦那さんには奥さんが二人いて一緒に住んでいるの？」

「つていう訳でもないんだけど……。父は脳血栓で半身不随になつて一人では何もできなくなつたんで母が介護をしているんです。それで、夏休みの間私も一緒にいてくれて母に言われて……」

「それじゃあ、奥さん同士、仲良く介護をしているのかい」

「本妻さんは、時々娘さんと一緒に車で来てすぐ帰っちゃうの」

「プカソで見たあのご婦人はその娘さんかい、ということは、君の姉さん？ 何

「だか偉そうだったね」

「私が妾の娘だから存在を認めたくないんだよ」

そう言うと、浪子は大きく伸びをして

「先生、私、どんなポーズをとればいい？」とあっけらかんとしている。圧倒されるほどの野放図さが眩しい。

「窓際に立ってちよっと動いてみて、……ああ、それでいいよ」

万歳をした手を軽くつなぎ斜め上に顔を向け、右足を引いて重心を掛けた姿は、体全体がねじれて見事に決まっていた。

「ポーズをとるの、上手いね」

「デザイナーのたまごだもん」

「お見それしました！」

私は描きながらウキウキしていた。彼女のポンポン喋る言葉が、内容はともあれ、陽気な音楽のように響く。私は何枚も何枚もクロッキーを描き続ける。こんなこと、何年ぶりだろう。

「ところで奥さんは、お妾さんに旦那の介護をされて嫌じゃないのかね、それに、君や、君の母上も偉いね」

「母の陰謀なの、フッフ」

「ずいぶん意味深だね」

「ふっ、」

何なのだ！ 私はムキになって思う。だがそれ以上は、はぐらかせて言おうとしない浪子にじりじりしながら描いた絵は、手が自然に動き、光を放ちながら次第にクリスタルのようにモザイクになっていった。

「あなた、お夕食だけど、浪子さんもどう？」

ドアが開いて奥さんが顔を出した。

「ああ、もうそんな時間か、浪子君、今日はもういいよ」

気が付いたらもう夕闇が迫っている。慌ててモデル料を払ってから彼女にそう言うと、

「もういいの？ 又来ても良い？」と、妻と私の両方を見ながら聞く。

「お願いするよ」と言うと、

「はい」と言って、ちよっと残念そうに自転車で帰って行った。

次に浪子に会ったのは日曜日の昼だった。妻と旧軽井沢の教会の辺りを歩いていると、浪子が車いすを押しているのに出くわした。彼女の方が先に気が付いて

「プカソ先生、お散歩ですか」と、声を掛けられた。

「ああ、君、今日はプカソじゃないの？」

「いいえ、彼女はディナーのお当番だから……」と横から妻が言うと、

「遅番だから三時過ぎに行きまーす」と浪子はおどけて言い、一緒に歩いている夫人と、車いすに座っている老人の顔を見て、

「パパ、ママ、こちらはプカソ・佐藤先生だよ。ほら私、モデルのアルバイトを始めたって言ったでしょう」

老人と、知的な感じの夫人は私を見て、無言で頭を下げた。

「佐藤です。浪子さんに先日、絵のモデルをして頂いたのですよ」

「娘から聞きました。よろしくお願い致します」

ママがそう言うと、老人もかすかに頭を下げた。それからママは、

「会長、参りましょうか」と言い、私と妻に会釈をすると、浪子の手から老人の車いすの持ち手を変わり、教会の方に歩き去った。

「ママ、待つてよ」と、浪子も私達に一礼すると走り去った。

「へ妾か、あの爺さんも大変だろうな」、妻を見て思わず笑ってしまった。

「あの方、お妾さんなの？ 時々お店にいらつしやるけど、私は秘書の方だと聞いているわよ」

「ほー、それにしても、あの爺さん、浪子君とそっくりだったじゃないか。あれじゃあ、誰が見ても親子だ」

次の水曜日になった。

私は漠然と、浪子をモデルに『怒る女』シリーズを描いたら面白いものが出るような気になっている。

あの天真爛漫な浪子の心の奥底にあるマグマみたいなものなのだろうな。

「先生、こんにちは」。

期待通りの弾けるような元気な声が聞こえた。

「やあ、いらつしやい」

「ママとパパが先生によりくつって言っていました。二人とも先生の絵が好きで、抽象画の『春の馬車』を会社の応接間に掛けてあるのだと言っていました」

「それはありがたい。君にそっくりの父上の会社なのかい？」

「ええ、トータルハウスインテリアの『THIオハラ』って、聞いたことがあるでしょう。今は会長だけ……、息子が社長になって……」

「君のママとパパはそこで恋が芽生えたの？」

「はい。パパは創業者なんだよ。ママは新入社員で秘書課に配属になったんだけど、ママが入社して半年位経ってからパパは会長になったのだった」

浪子はそう言うと、涙がすーっと流れたのを、慌てて腕でぬぐい、照れ笑い

をした。

「そこでパパとママの間に何か悲しい事でもあったのかい」

私は、言いながらクロッキー帳を開いた。

「先生、嫉妬心って人間の感情の中で一番のすぐれ物だと思わない？」

「何だい、急に。嫉妬心なんて御免蒙りたいね」

「嫉妬されるんじゃないよ、する方だよ。」

ママはね、会社に入っただけに社長に夢中になったのだったって」

「六十過ぎの爺さんに？」

「うん、存在感があつて、統率力があつて、魅力的であこがれたんだって。あ、ママの父親は戦死したから、ママは母親の実家で育って、お爺さんに違和感が無かつたんだと思う。お爺さんが好きだったんだよ」

そう言つて、又、涙をぬぐっている。

「そんなもんかね。で、会長の方はどうだったんだい」

私は筆を動かしながら、浪子の方はどうだったんだい」

「パパはね、水商売の人とかはお付き合いしたことはあつたのだろうけど、糟糠の妻を泣かせるようなことはそれまで一度もなかつたんだって。会長になつて暇が出来てから、パパとママはラブラブに……、とは言つてもママの方が積極的だったってママは言っていたけ。それで私が生まれたってわけ。」

ママは『愛する人の子が欲しかったからあなたを産んだのよ』っていつも言っているんだよ」

「ママは君を大切に思っているんだね」

「うん。私は……、高校の時に気が付いたのだけど、ママの私生児でパパに認知されてなかつたんだよ。それって、ママの嫉妬心だと思うんだ」

「何だい、嫉妬心って……」

「パパはママとどんなに愛し合っているって、妻を一番大事に思っていたんだって」

「そりゃ、妻は怖いよ」

「せんせつたら、もう！」

小さな電気屋から、共に頑張つてここまでの会社にした糟糠の妻は、パパにとって頭の上がない一番大事な人なんだって」

浪子はそう言つて、又、涙を拭いた。

「それじゃあママは身を引いたのかい」

「うゝうん、ママはそこで奥さんには敵わないって思うのよ。でもここからがママの嫉妬心なんだよ。あの奥さんに負けたくない！ 自分も彼の奥さんにある人には敵わない、って言わせてやる！ って思つたんだって」

「それが嫉妬心かい？」

「先生、嫉妬心っていうのは人間の感情の中で、一番のすぐれ物なんだよ。悔しい、負けたくない、という感情を呼び覚まして、やる気を起こさせる原動力になるじゃん」

ゲンコツを振りながらムキになって喋っている浪子の顔は、もうすっかり腫れが引いていた。

若いな、目鼻立ちがはつきりして南国風の美人だ。

「ママは、子供の認知はしなくても良いから、今まで通りに働かせてくださいってパパに頼んだの。子供は一人で育てます、って啖呵を切って……」

私は彼女の若さに圧倒されて疲れを覚えた。

「浪子君、そのコーヒーマーカーでコーヒートを淹れてくれないか」

そう言ってベランダに出て深呼吸をした。

今日はパソコンが休みだから、妻は出かけている。私にとっては三人目の妻だ。今の妻との間には子供はいないが、二人の元妻は、私の子を一人づつ育てている。二人とも女の子だ……。考えても仕方がない。疲れた。

「浪子君、今日はこれまでにしよう」

二三日してから浪子を描いたクロッキーを見ながら、顔がお岩さんみたいに腫れあがっている絵の一枚を選んだ。これを油絵に……。やっとアトリエに入る気になったのだ。

画架に五十号の真っ白いキャンバスを置いた。画布と向き合って一筆を入れる時の緊張は何十枚描いても変わらない。

斜め上に顔を向け、万歳をした両手を軽くつないでいる上半身の輪郭から全身を描いていく。腫れた顔や手を丹念に描き、それを徐々にデフォルメしていく。時間をおいて何度も何度も……。絵全体に色調を抑えた渦巻きが描かれ、原型を残して仕上がっていく。最後に白や黒、赤や緑の油絵の具を、塊や鋭い線にして置いて行く。

出来た。まるで彼女のエネルギーが私に乗り移ったようだ。

〈怒り〉という題にしよう。浪子の怒りが私自身の中にも飛火しているように昂っている。もう一度離れて眺め、乾かすために壁に立てかけた。

外は風が強く、樺の大木がわさわさと音を立てて揺れている。

彼女の来る水曜日になってふと思いついた。

あれ、彼女の母親は、浪子を父親に認知してもらわなかったって言ったけど……、彼女のネームプレートには「小原浪子」って書いてあったじゃない

いか。父親の会社名は「THIオハラ」だろう。

「こんにちは、先生」午後一時丁度に浪子はやって来た。

「ワーツ、出来上がっている！ これは私だよ。顔が腫れあがっている時だ。これ、すごく怒っているみたい……」

「そうかい。『怒り』、っていう題にするかな」

「……怒っていたかなあ」

「嫉妬心が怒りを呼び覚ますって言ってただろう。それで、君は、認知して貰えなかったのだろう、父親に」

「ああ、私の名前は小原浪子だから？」

随分勘の良い子だ。そう言えば、彼女の母親も知的な顔をしていた。頭が良いんだろなあ、とボーッとしていると、

「つい最近、ママの陰謀が功を奏して、認知されたの」。突然浪子が言った。

「なんだい、突然。陰謀とは物騒だね」

「本当なのよ。三年前にパパが脑梗塞で倒れたのだけど、一命をとりとめたでしょ、その時、パパも糟糠の妻も八十を過ぎていたの。ここからママの陰謀が始まったのよ。その時、ママは五十前だったけど、会社を早期退職してパパの介護をすることを申し出たの。糟糠は娘に介護をしてもらいたかったのだけど、断られちゃったのよ、ほら、あの嫌な奴。」

「おいおい、その〃そうこう〃っていうのは何だい」

「いやだー先生！ 糟糠の妻に決まっているじゃん。妻は省略！」

「妻は省略って、恨みがあるからかい」

「そんなのないよ。バツカみたい！」

「馬鹿みたいか〜」

「そこでね、パパと糟糠は相談して、せっかく元秘書が言ってくれるのだからって、軽井沢にあるこの別荘でママに面倒を見てもらうことにしたんだよ。勿論、無償の好意でひたすら尽くしたんだよ、ママは。」

パパはママに感謝したし、糟糠だって時々、娘と一緒にやってきては、ママにお礼を言っていたんだって。

ここからがママの陰謀のクライマックスであります。

今年の夏は暑いでしょう、夏の初めにパパは体調を崩して一時はもう駄目じゃないかって、お医者様に言われて、慌ててママは私を呼んだのよ。そして介護を手伝わせたの。

私は涼しい軽井沢で夏を過ごすなんて夢みたいだったし、たまにしか会えないパパとずっと一緒に居られるのも嬉しくて、ウファウファで来たのよ。そう

したら、糟糠と娘は私を見てびっくりしちやって……。なんていったって、生き写しじゃんパパに。

それに、パパとママがずっと昔に関係があったのは、承知していたらしいんだけど、ママに子供がいるなんて知らなかったんだって。

そこで、死にそうなパパが、糟糠と娘に涙ながらに言ったの。

『これは浪子と違って、僕の娘なのじゃが、もう二十歳を過ぎてしまった。今まで秘書の立木さんの配慮で彼女の私生児として一人で育ててくれた。並大抵のことではなかったと思う。』

僕と立木さんの間は、彼女が浪子を一人で育てるって言った時から、もう他人として生きてきた。浪子を娘として可愛がったことは一度もない。

ひどい父親だろう。せめて、これから就職をしたり、嫁に行ったりする浪子に肩身の狭い思いをさせないで済むように僕の籍に入れてやることに決めた。

僕は今までお前には苦勞をかけたが、良い夫だっただろう、良い父親だったろう、どうか気持ちよく許してくれ。浪子には罪はないのだから』ってわけで、私はつい最近、立木浪子から小原浪子になったんだよ」

「すごいねー、君のママは」

私は、あの知的な感じの浪子のママの顔を思い浮かべた。

浪子は、父親にそっくりで母親には全く似ていないと思っていたが、時々感じる浪子の知性があのママのものなのだ。

「せんせい、もうわかったでしょ、私が小原浪子になったワケ。

ねー、今度は笑う女にする？ それとも泣く女？

私、先生が大ーい好き。若かって良いでしょう、先生に若さを分けてあげる。

あつ、次は裸婦を描けばいいじゃん！」

うー、勘弁してくれー。四人目？ 冗談じゃないよ！

完（7，360字）